

二上登山

「チエ、明日の二上登山の準備はできたのかい。」

「うん、もうばっちりだよ。」

登山がしゅみのお父さんは、二上山の冬の様子などをうれしそうに話し始めました。

「明日は晴れみたいだし、山ちようからのながめもすばらしいだろうね。一年生だったら、もしかしたら初めての登山の子もいるかもしれないね。チエは六年生だから、グループの先頭で登るのかい。」

「ええっとね……。」

二上山は、奈良県と大阪府の県境にある、おだけ雄岳とめだけ雌岳という山ちようを二つもつ山です。比かく的登りやすい標高でありながら、ちよう上からのながめがよく、四季を問わず、登山客がおとずれる山です。

わたしの学校では、毎年、冬に全校児童が、たてわりグループで二上山に登ります。

「実は、先頭じゃないんだ。わたしは、あまり先頭に立って、みんなを引っ張っていくタイプじゃないから……。一番後ろから登ることにしたの。」

お父さんは、わたしの顔を見てにっこり笑いながら言いました。

「そうか、チエは最後尾から登るのか。グループで登山するときには、並ぶ順番でそれぞれ役わりがあるんだよ。明日は、自分の役わりをよく考えて登りなさい。」

（お父さんは、六年生だから先頭で登ってほしかったのかな。だめな六年生と思われたかな。でも、リーダーになる自信もないし。一番後ろからグループについて行くだけのわたしに役わりなんてあるのかな。）

登山当日は、風もなく太陽の日差しがあたたかい登山びよりです。学校から四〇分ほど歩き、ゆうせんじ祐泉寺前に到着しました。ここが、登山道の入り口です。登山道は、それまでの道とはちがい、岩がむきだしになり、木々がおいしげった森の中です。グループの先頭は、コウくんです。コウくんは、わたしと同じ学年とは思えないぐらいしっかりしていて、グループのみんながたよりにしているはん長です。登山道に入ってから、すべりやすそうなところや、登りにくそうなところで、みんなに声をかけています。（コウくん、さすがだな。それにくらべて私は……。はあ……。）

コウくんの後ろすがたを見ながらわたしは、自分の役わりについて考えてしまおうのです。

森のところどころに、先週ふった雪がまだ残っています。一年生のアヤちゃんも雪に気づいたのか、そっちらかり見ながら歩いていきます。

「アヤちゃん、雪がきれいだね。でも、前を向いて歩かないとあぶないよ。わたしといっしょに歩こうか。」

「チエちゃん。ありがとう。」

アヤちゃんの元気いっばいの声を聞いて、少し心が軽くなったわたしは、一番後ろからアヤちゃんや、つかれてペースがおちてきた子たちをばげましながら登っていききました。

山ちようまでの半分ぐらいのところまで休けいです。ここから馬の背までは坂がよりいっそう急になり、道には岩がゴロゴロしています。休けい中、いつも元気な二年生のタカシくんがほとんどしゃべらず、ずいぶんつかれているように見えました。

（ここから、坂がきつくなるのに。タカシくん、だいじょうぶかな。コウくんは、気がついているのか



な。コウくんに言ったほうがいいのかな。」

コウくんが、リュックを持ち上げ、出発の準備を始めました。

「そろそろ出発しようか。山ちようまで一気に登るよ。」

(やっぱり、わたしが言わなくちゃ。)

「コウくん。ちよっと待って。少しつかれている人もいるから、

ペースをおさえて登ってほしいの。」

わたしは、思い切ってコウくんに伝えました。

「分かった。少しペースを考えながら登るよ。ここから先は、登りもきつくなる。みんなが安全に登れるように、後ろから見

気づいたことがあったら教えて。」

コウくんがわたしの方を向いて大きく手をふってくれたので、わたしも手をふりかえしました。コウくんは、休けい前よりゆっくりと歩いてくれています。タカシくんも、隊列からおくれることなく登っています。わたしは、後ろからみんなを上げましたり、安全に気をつけて声をかけたりしながら登りました。だんだんわたしたちの頭上をおおっていた木々が少なくなり、青空がたくさん見えるようになってきました。山ちようまで、あと少しです。

ついに山ちように着きました。空はすみわたり、雌岳のちよう上からは、西には大阪平野、東には奈良盆地が一望できました。

「うわー、きれい。すぐく遠くまで見えるね。」

思わず声を上げたわたしに、アヤちゃんが近づいてきました。

「チエちゃん。ありがとう。わたしね、初めて山に登るから、ちよっと心配だったの。でも、チエちゃんのおかげで、楽しく登れたよ。帰りもいっしょに歩いてね。」

「うん。いっしょに歩こう。」

アヤちゃんの思いがけない言葉に、つかれが一気にふっ飛びました。グループのみんなと景色を見ていると、後ろからコウくんが話しかけてきました。

「後ろを気にかげながら歩いているつもりだったけど、気づけていないこともたくさんあったよ。声をかけてくれてありがとう。おかげでだれもケガをすることなく、安全に登れたよ。帰りも後ろはたのんだよ。」

こみ上げてきたうれしさとともに、わたしは昨日、自分の役わりを考えて登るんだよと言っていたお父さんの笑顔^{えがお}を思い出していました。

(お父さん。自分の役わりを果たすって、とっても気持ちがいいんだね。)

心の中でお父さんに話しかけながら、わたしはコウくんに答えました。

「まかせといて。何かあったら声をかけるよ。帰りもいっしょにがんばろう。」

○チエは、お父さんの笑顔を思い出しながらどんなことを考えていたでしょう。

○集団の中で一人一人が役わりを果たすためには、どのような考えが大切でしょうか。

